

藤田西湖から継承する武術について
—「言葉以前の歴史」として『拳法図』を理解する試み—
瀧元誠樹（札幌大学）

本発表では、藤田西湖が遺したとされる『拳法図』に描かれた技を理解するにあたり、武術としての技法を実証的論理と説明で解き明かすだけでなく、絵図として継承している意義について考えていきたい。

『拳法図』は、藤田が蒐集した武術諸流派のうち、天狗による武術の技を描いた59枚の絵図のみで構成されているものである。この『拳法図』は、武術研究所が昭和60（1985）年に300部限定で刊行している。同じ絵図は東北大学総合知デジタルアーカイブポータルで『拳法圖』（狩野文庫、作者不明）として閲覧可能となっている。この『拳法図』に描かれた様は、武術研究所を継いだ藤谷昌利が中心となり全日本体道連盟で、再興し継承してきている。

技の内容を習得するには、はじめのうちは師範や先輩の手解きを受ける。文字通り手をかけて解き明かしてもらうわけだが、武術であるからこそ身をもって感覚していくしかない。その技法を実証的論理で説明するということは、攻防のうちに起きている動きを分解し、言葉にすることで理解していくことになる。こうした理解の仕方は、主観的な身体感覚を、客観的に捉えて言葉によって表現しようとする試みである。しかしながら、一瞬のうちに極められている身体の在り方を、正確に表現しようとすればするほど、動きは細分化され、固定化されてしまう。記号としての言葉で表現するには、どうしても近似的にしか技に近づくことができないことになる。

さらに言えば、言語化するという行為は、言葉に還元されないそのものの作用というか〈からだ〉の在り方を、語ろうとしているのである。したがって、どうしても言葉にならずに零れ落ちてしまうことがある。だからといって言葉にするのをあきらめるのではない。こうした言語化の果敢な実践がなければ技を理解することもかなわないことになってしまう。言葉は、「意識以前の共生の世界」（竹内敏晴）が「理解」という認識の地平に立ち現れたものと言われる。だからこそ、武術の継承方法は「口伝」としてなされているだろう。

その一方で、『拳法図』は「絵図」にすることで技の「存在」を明示するとともに、技の「生成」を求めていると考えられる。というのも、そもそも技は、再現するのでも、模倣するのでもなく、対峙する相手によって現在時でしか起こり得ないのだから。

このように理解を進めると、『拳法図』は、先人たちが繰り広げてきた攻防を^{つづき}真にとらえた「言葉以前の歴史」（今福龍太）としてあり、継承すべき技は創造するようにして生み出さなければならないということを伝えていると考えられる。